

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ  
 ◎ 住吉歴史資料館

第10号 渦森銅鐸  
 復元記念号

# 住吉歴史資料館だより

資料館だよりは今回で節目の10号となります。創刊号は平成21年10月に発行され、以来財団法人住吉学園のバックアップのもと、地元住吉に密着した話題を提供してまいりました。第10号は「渦森銅鐸」復元記念号としてお届けできることを大変嬉しく思います。住吉の宝物である、重要文化財クラスの「渦森銅鐸」を復元し、5月に奈良文化財研究所の難波洋三先生の講演会など、銅鐸デビューを企画しております。これは資料館発足の永年の懸案でありました。

ここで資料館のあゆみについてとりまとめてご報告致します。

平成13年、本住吉神社御鎮座千八百年を記念して住吉歴史資料館が開設されました。展示室は本住吉神社世話人会により日曜開館し

## 住吉歴史資料館のあゆみ

住吉歴史資料館  
 事業推進委員会

ております。

平成21年より神戸大学地域連携センターと連携覚書を締結し毎木曜日にセンター派遣の専門委員の先生の指導により事業を行っております。

住吉の子供たちが住吉のすばらしさを知り、いつまでも住み続けたいと思うようになつてほしいとの願いが原動力で、「再発見! 菟原住吉、昔を未来へ」が資料館のキャッチフレーズです。

基本事業として、本住吉神社宮司横田家に伝わる古文書「横田宮司家文書」の整理・解説、住吉の歴史に関わる調査研究、住民のみなさんに昔の事を聞く聞き取り調査を行っています。住吉の歴史は、一方で災害の歴史であり、大震災、大水害など災害の聞き取り調査など



復元渦森銅鐸 京都「和銅寛」製

### 渦森銅鐸復元記念 第10号目次

#### 住吉歴史資料館のあゆみ

住吉歴史資料館事業推進委員会……………1ページ

#### 渦森銅鐸と渦森山のいつたえ

住吉歴史資料館事業推進委員内田雅夫…2～7ページ

#### 住吉各学校合同お茶会と防災総合展

住吉歴史資料館事業推進委員前田康三…8～9ページ

#### 住吉村誌を読むドビワリをめぐる争論

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター研究員・住吉歴史資料館専門委員木村修二…10～11ページ

#### 訂正とお詫び

住吉歴史資料館だより編集委員 ……………12ページ

も重要です。今年3月には、『阪神淡路大震災資料集―住吉の記憶 住中と水』を刊行し、住吉の独自の復興手法を明らかにしました。

また、資料館の連携事業として、住吉の3つの学校である、神戸市立住吉中学校、住吉小学校、渦が森小学校の児童生徒たちに住吉町の歴史、産業、本住吉神社祭礼などの紹介を行っています。災害に備え、各学校と連携し防災意識の普及に力を入れています。住吉中学生は、「もし、万の時」は、平日昼間でも地元ですぐ力を発揮できる集団は、われわれ中学生なのだ」との心強い自覚を持ってくれております。

連携といえば、東灘図書館とは年4回の図書館玄関脇のふるさとコーナーでの展示を開始しました。現在6月末まで、「住吉の原風景とだんじり祭写真展」を行っています。これに加えて、尚函会100回、震災事業KIZUNAの(絆)の会などの住吉学園の事業にも、資料の提供、映画製作への協力などを行っています。

未来へ向け、住吉歴史資料館への尚一層のご理解、ご支援をお願い致します。

## 住吉歴史資料館ご案内

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。関係文書、記念物、言い伝えの収集。
2. 展示物のメンテ。展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画してみんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。成果の発表。

## お願い

広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

1. 各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗 など。
2. 各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書 など。
3. 各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車（いわゆる“馬力”）の道具類などの労働具。
4. 古い写真（近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など）、小学校の卒業アルバム、卒業証書。
5. 災害時の記録や写真。（阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など）
6. 戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
7. だんじり、住吉祭の写真。（渡御、宮入、宮出し など）

また、長年住吉に住んでおられる方々に気軽にむかし話をしていただいております。“ああ、あの人なら、住吉のこと”よく知ってはる”、という方をご紹介下さい。

### 訂正とお詫び

平成26年12月15日付住吉歴史資料館だより第9号記事「住之江のだんじり」につき次の2点を訂正致します。

1. 酒井清さんを兵庫地車研究会所属と記述しましたが、氏は既に退会されており、同会では、氏の功績を称え、現在、同会の名誉会員として遇されているとのご指摘を頂きました。
2. 「各地区だんじりの歴史」については兵庫地車研究会でまとめた資料と記述しましたが、同会より、同会の制作ではありませんとのご指摘を頂きました。

茲に謹んで、不都合をお詫び致します。

編集委員 内田雅夫(資料館事業推進委員)

### 編集後記

5月28日に神戸市立住吉中学校で奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの難波先生を迎えて、「渦森銅鐸」の復元を記念して講演会をお願いしています。銅鐸出土地周辺は、開発により環境が一変して、出土当時どのような場所であったのかは想像もつかなくなっています。それを何とか雰囲気だけでも感じて頂こうと資料館所蔵写真を選び抜き昔の渦森山の景観を復元しました。

木村先生の「ドビワリ」をめぐる争論は、米作りの基本である水をめぐる論争です。住吉川の水をめぐり、村々が争いました。その裁定は大阪の谷町代官が行っています。

資料館の木曜開館は7年目にはいりました。神戸大学地域連携センター、住吉の2小学校、1中学校、東灘図書館と連携して事業をおこなっています。防災への取り組みは今年も続きます。避けられない災害ならせめて被害を局限できるように子供たちと考えていきたいと思っています。本住吉神社の横田宮司家所蔵の古文書は江戸時代の貴重なものですが、これの解説も進めています。いずれ、その成果をわかりやすい展示でご紹介したいと思っております。(M.U.記)

■資料館の作業日は毎週木曜日の午前中です。

また、別途、日曜日は展示室を開館しています。(世話人会の委員の方がお世話)

■資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。

平成27年は、1月18日、3月8日、5月10日、7月12日、9月13日、11月8日の各日曜日です。

住吉歴史資料館 本住吉神社内御本殿西 〒658-0053 神戸市東灘区住吉宮町7丁目1-2 fax専用078-201-3738 メールアドレス shiryokan@iris.eonet.ne.jp



# 渦森銅鐸と渦森山のいいつたえ

住吉歴史資料館事業推進委員 内田 雅夫

銅鐸は、紀元前2世紀〜3世紀ごろの弥生時代の青銅器で、おまつりに使用された楽器といわれます。住吉歴史資料館では、この度、地元住吉出土の「渦森銅鐸」を復元しました。これを記念して、5月28日、奈良文化財研究所の難波洋三先生に神戸市立住吉中学校でお話して頂きます。

「渦森銅鐸」は昭和9年（1934）、当時はまだ、深い山であった渦森山のふもと字加茂といところ



写真① 渦森銅鐸出土記念碑（渦森台1丁目）

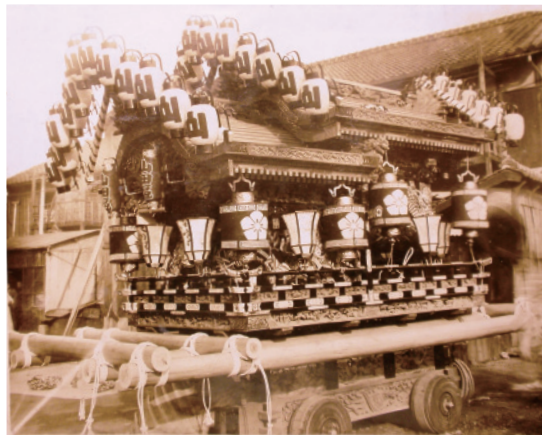
で発見されました。高さは46センチで内側に「環」（銅鐸を鳴らす棒（舌）をつるすフック）が「有」ることから「有環銅鐸」といわれ、銅鐸が何に使われたのかを考えるきっかけとなる大発見になりました。

（写真①）（表紙の写真）

当時の住吉村では、渦森山、鴨子ヶ原など、住吉の裏山や丘は将来、良質な住宅地となると見込み、村営の「住吉村営水道」を敷く工事をしていました。そして、渦森山の高層配水池設置工事現場で技師の梶本さんという人が偶然、銅鐸を見つけたのです。

なにせ、貴重な文化財らしいという事で、住吉村では、当時、まだ開館したての「白鶴美術館」に保管を頼み、時々展示しようと考えていましたが、宮内省より提出命令があり、昭和12年3月帝室博物館（現在の東京国立博物館）の所蔵になりました。

銅鐸のお買い上げは三千円で、同じころ山田区が新調した「だんじり」が六千円でした。（写真③）



写真③ 山田区だんじり昭和9年2月

## 銅鐸が出土した渦森山など、住吉の裏山のように

第10号では、銅鐸が出土した渦森山など、住吉の裏山のむかしの様子につき、『住吉村誌』（以下、『村誌』といえます）の記述などからご紹介します。

『村誌』は昭和10年頃（1935年頃）の資料に基づいて編纂されています。『村誌』の記述は、六甲山の山ろくにあった渦森山や、その周辺の山や丘について、当時、住吉村

の人たちが、どのような思いをもっていたのかがわかる貴重なものです。今では間違っている個所もありますが、そのまま、読みやすくして紹介します。

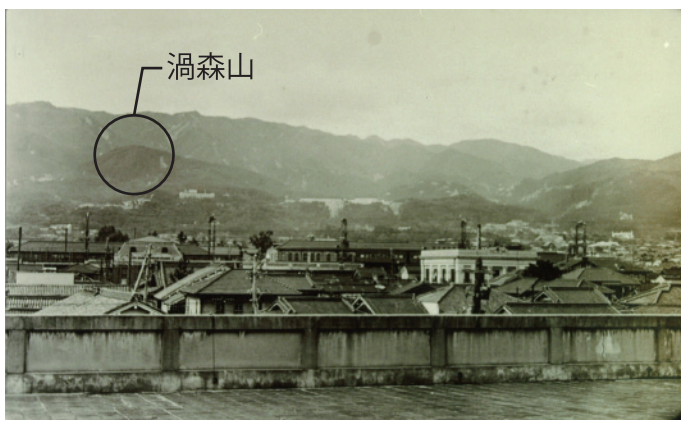
現在、六甲山南側の山ろくに広がる①渦森台1丁目〜4丁目、②鴨子ヶ原1丁目〜4丁目、③住吉山手5丁目、そして④住吉台などは19系統や38系統の神戸市バス、くるくるバスが走る市街地です。しかし、ほんの50年ほど前までは、まつたけ狩りや子供たちが「あけび」取りで遊んだところで、前2〜3世紀ころの弥生時代もこうだったのかなと思わせる山と丘でした。（写真④）（写真⑦）

昭和30年代後半（1960年以降）の高度経済成長の波により、渦森山は削り取られ、その土砂で海岸が埋め立てられ工場が進出してきました。山そのものがなくなり、山であったことすら知らない人も多いです。（写真⑤）

さて、上の住所を昔の地名に置き換えてみると、①渦森山、②鴨子ヶ原、③赤塚山、そして④荒神山となります。



写真⑤ 渦森山 右側が削りとられつつある 神大附属卒業アルバム1964年



写真④ 阪神御影駅の南、旧武庫郡御影町役場屋上より見た渦森山1935年



写真④ 渦森山と天神山。御影町堂の裏より現況2014年



写真④ 渦森山(甲南病院の後)と天神山。御影町堂の裏より1962年



写真⑦ 渦森山を東より。山の上側3分の2は削られてなくなった。建物は水車群。住吉山手9丁目(住吉村字焼ヶ原)。昭和10年(1935)頃





写真⑨ 石器ややじり(資料館所蔵)鴨子ヶ原出土という



写真⑩ 赤塚山1953年、神戸大学教育学部を通して神戸市街と海



写真⑪ 荒神山。1939頃白鶴美術館下の住吉川より  
左側に今もある白鶴美術館の白い塀が写っている。わかりますか？

「鴨子ヶ原」というのだ、と『村誌』はいいます。  
加茂氏は秦氏と深い関係にありました。

**赤塚山、荒神山**

渦森山の南東側には赤塚山があり、ここからも石の矢じりなどの石器や弥生式土器が出土しています。(写真⑨) 赤塚山の名は、ここから銅が出るから土が赤いのだ、とか、有馬

温泉の金泉と同じ湯脈が通っているから赤いのだ、とかいういつたえがあります。赤塚山のふもとを流れる住吉川の支流、西谷川の川床の石は少し赤くなっており、温度も高いといわれています。

赤塚山は「山岳信仰」の修業の場であり、また、徳本上人が仏の教えを住吉村のひとたちにひろめたところです。(写真⑩)

その東側は、西谷川をはさみ、「荒神山」です。ここからも弥生式

土器や矢じりなどが出土しています。

『続住吉学園誌』によると、荒神山を開発しようとしたとき、不思議なことが起こったということです。建設関係者が木を伐ろうとしても手が動かず伐ることができなかったとか、いくら注意してもブルドーザーが転落するとかでした。「荒ぶる神の山(乱暴な神がおられる山)」として「荒神山」という名がついたのでしょうか。(写真⑪)

**保久良神社**

いまでは、これらの山や丘はすべて住宅地になり、写真のような昔の風景は全く想像できません。しかし、現在でも、当時の雰囲気を感じられるところがあります。それは、住吉の東、同じ六甲山の山ろくの丘にある「保久良神社」の境内です。

そこには大石があちこちにあり古代の磐座(いわくら)神々の居られるところといわれています。立岩、神生岩な



写真⑥ 鴨子ヶ原と渦森台境界のバス道。2015年4月



写真⑥ 鴨子ヶ原と渦森山 境界の山道1961年3月頃

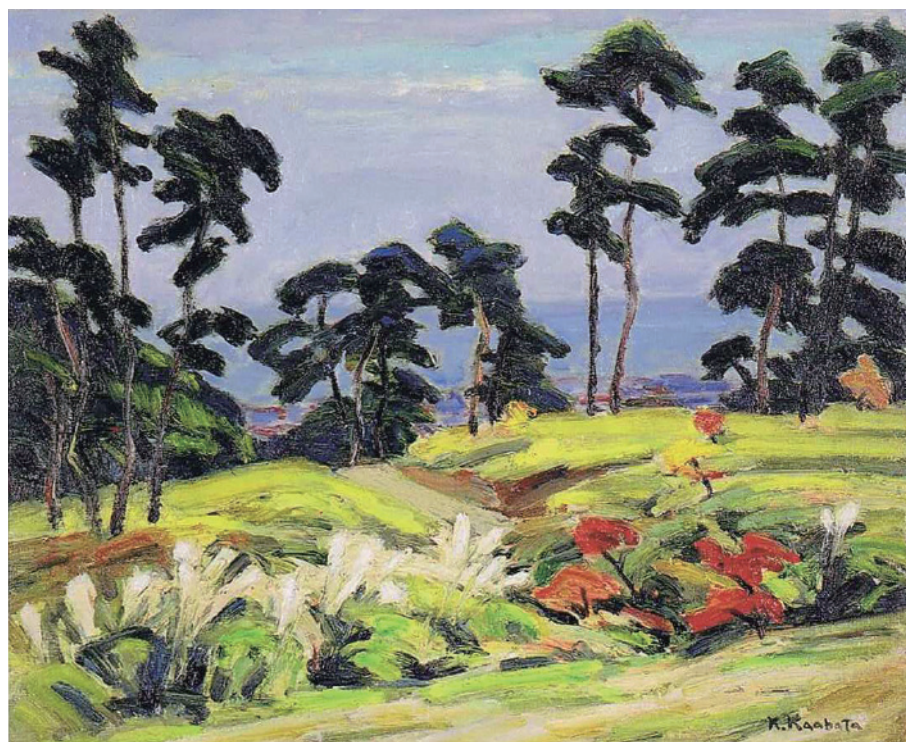
## 渦森山、鴨子ヶ原

渦森山は、甲南病院から上に向かつて鴨子ヶ原を登りきったところにあつた山で、兜を伏せたような丸い形をしており、木々がよく生い茂り、その頂上362.2メートルのところには大きな二本の松が生えていました。よほど大きな松だったらしく大阪、神戸からの良い目標に

なつたそつです。(写真⑥)

山上には、古代の巨石文化の遺跡であるドルメン(石机)があり、山ろくには大石で丸く囲ったストーンサークル(環状石)の一部が残り、これらから古代の神々が居たところといわれています。

渦森山の南には鴨子ヶ原がひろがります。海拔150〜300メートルの緩やかな傾斜の丘で、ここにも大石があちこちに置かれ、石と石で仕切られた内側にた



写真⑧ 「丘の上(鴨子ヶ原)昭和33年」川端謹次画伯。  
鴨子が原交番付近より南を見たと思われる  
(2000年4月15日神戸市立小磯記念美術館「川端謹次画伯画集」より)



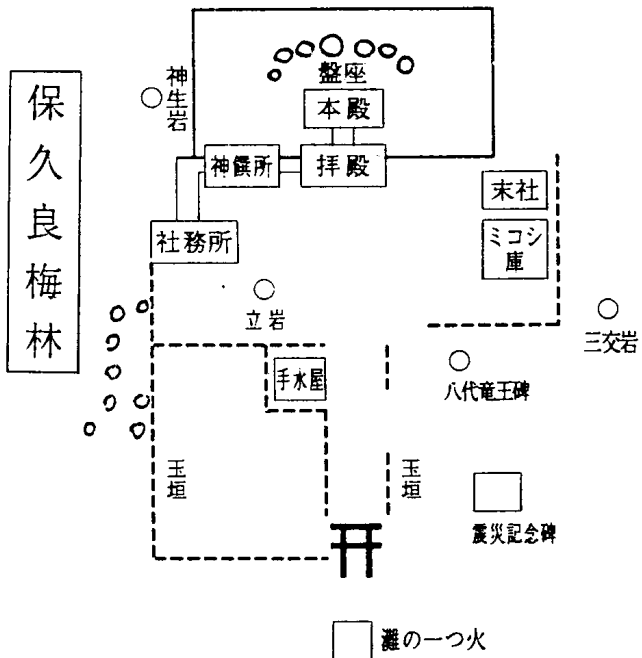
写真⑧ 鴨子ヶ原山林中の古墳

くさんの古墳があつたといわれています。また、矢じりなどの石器も出土しました。(写真⑧)

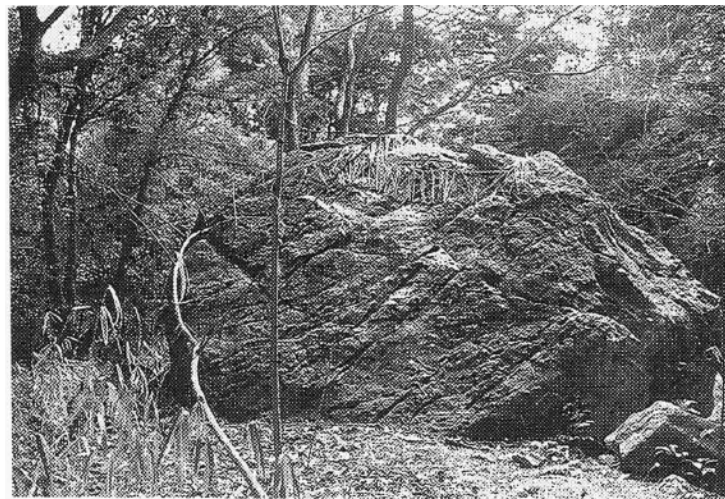
地名はどんな意味を持つのでしょうか。『村誌』は、渦森は「秦森」ともいい渡来人の秦氏が住んでいたところといえます。秦氏は蚕から絹を作る「養蚕技術」を持って朝鮮半島から渡って来ました。「はた」は「はたおり」から来ています。映画村がある京都の「太秦」も秦氏の居住地といわれています。

一方、鴨子ヶ原には出雲(島根県)系の豪族加茂氏が居住し、もともと、「加茂氏が住む原」だから、





写真⑫ いわさかの大石が保久良神社社殿を丸く囲っている。



写真⑫ かみなり岩 保久良神社境内

## JR住吉駅周辺の遺跡

今度は、平地や海岸の遺跡を見てみましょう。住吉は古代より温暖で住みやすく食べ物豊富で人々の生活の跡である古代遺跡がたくさんあります。それらは、住吉宮町遺跡、郡家遺跡などで、その中に住吉東古墳、坊ヶ塚古墳、東求女塚古墳などの古墳があります。東求女塚古墳は全長80メートルもあり、銅鏡6枚や首飾りが出土し、それらも東京の国立博物館に所蔵されています。

住吉宮町遺跡では70あまりもの古墳やおびただしい土器などとともに、5世紀ごろ、馬を埋葬した跡が出土しています。馬は軍事力、生産力を格段に高める貴重なものでした。お隣の郡家遺跡からは、韓式系土器（朝鮮半島の様式を汲んだ土器）も出土しています。

これらをまとめると、5世紀ごろ、住吉宮町遺跡がある住吉駅の周辺は豊かで、朝鮮半島との関係を持つ集団が居住しており、大きな軍事力と生産力を持っていたらしいことがうかがわれます。住吉は大阪湾を抑える位置にあり古代から重要な地域であったでしょう。

## 鎮座地 神戸市東灘区本山町北畑六八〇番地 保久良神社

ど大石には名前が付けられており、しめ縄をかけた岩もあります。

それらの巨石がまるく囲む中ほどに本殿や拝殿が建てられています。境内一帯は弥生時代の遺跡であり、ここからは銅戈（ほこ）やおびただしい弥生式土器が出土しました。（写真⑫）

## 銅鐸の出土地は聖域？

『村誌』は、「渦森銅鐸」の出土地点が渦森山のふもと海拔240メートル、大阪湾を一望できる、石に囲まれた聖域らしきところといえます。

また、灘区では、桜が丘というところから昭和39年（1964）、銅鐸14個と銅戈7本が出土しました。後に国宝に指定されます。渦森銅鐸の出土地から、ほんの1、000メートルほど西へ行った谷の向こう側で、ほぼ同じ海拔です。桜が丘は、

## 山の人々と平野の人々の謎

古代でも、平野や海岸ぞいの土地の方が暮らしやすかったはずですが、なぜ、山ろくの丘に住み、渦森山で金色に輝く銅鐸を使っておまつりをしたのでしょうか。

前2世紀〜3世紀ころ渦森山で銅鐸をまつった人々と、4〜5世紀ごろの住吉宮町遺跡など平地や海岸に住み、大きな生産力や軍事力を持ち、おびただしい古墳を作った人々は同じ考えを持った、同じ人たちでしょうか。あるいは、よそから違う人た

ちが入って来たのでしょうか。

本住吉神社は住吉宮町遺跡のほぼ真ん中にあります。そして、その真北が渦森山で、そこには本住吉神社奥之宮がまつられています。

## もうひとつの秘密

島根県（出雲地方）は、銅鐸や銅戈がたくさん出土し、また、「磐座」もたくさん残っています。これらは、住吉とよく似ています。

偶然の一致かしら、地名も出雲地方と住吉は対応します。出雲側は、

「加茂岩倉」遺跡並びに「荒神谷」遺跡、これに対して住吉側は「出雲系豪族の加茂氏の鴨子ヶ原」、並びに「荒神山」です。ひょっとして、渦森は出雲森かもしれないですね。同じひと達なのかしら？



写真⑬ 桜ヶ丘を渦森台から見る。2015年4月



写真⑬ 荒神山（住吉台ミニコープ前）より渦森、桜ヶ丘を見る。2015年4月



写真⑭ 六甲山ろくに連なる山や丘。2015年4月



# 住吉各学校合同お茶会と防災総合展「常二備へヨ」

住吉歴史資料館事業推進委員

前田 康三

住吉歴史資料館では毎年恒例となっており、住吉小学校・渦が森小学校・住吉中学校の合同お茶会を平成26年10月26日(日)に開催しました。同時開催の展示会では、過去3年間、児童生徒と一緒に防災を考える展示を行っており、その4回目として、「遺跡からわかる住吉の災害Ⅱ」を行いました。

## ●住吉小学校の児童さん



住吉小学校 当館委員による御茶席へ入る前の説明。

これは、今までの、「防災と私たち展」(平成23年)、「阪神大震災と住吉展」(平成24年)、「遺跡からわかる住吉の災害展」(平成25年)を総合した形での展示でしたが、教訓は「常二備へヨ」に行きつきます。更に、この言葉は、災害に備えるのは当然として、日頃から生活自体をきっちりとしたものにしよう



住小御茶席へはいりました。

いう意味もあることを子供たちと一緒に考えています。

今回のお茶会は3学校から、児童、生徒、保護者、先生方合わせて92名の参加を頂きました。ありがとうございました。

毎年、アンケートを実施しており、以下、その一部をご紹介します。

### お茶会について

・お茶の作法についてもっと知りた

い。

・お茶会は楽しい。

・(保護者の方から) こういう地域の取り組みに中学生が参加するのはとても良いことだと思います。



まず、正客の校長先生へお茶を。



住小。住吉の災害展Ⅱの見学

## ●渦が森小学校の児童さん



渦が森小学校御茶席校長先生がお正客



渦小御茶席。保護者さんも

NA(絆)の会」の一環で、『阪神淡路大震災資料集ー住吉の記憶住中と水』を発行し、住吉独自の復興の手法を検証しました。これは神戸大学地域連携センターの指導の下、住吉の人たちの震災復興につき聞き取り調査をして、それをまとめたものです。資料集は引き続き刊行していきます。

震災20年を前に、神戸市では昨年8月防災の取り組みとして、「被災地中学生災害サミット2014 K O B E」が開催されました。

資料館だより第9号で紹介しましたが、住吉中学校が神戸の中学校の代表校の一つに選ばれ、東北地方や雲仙長崎、それに兵庫県佐用、奈良県五條の中学校とともに合宿し、発表しました。この「災害サミット」をフォローする形で、住吉歴史資料館は10月の住吉中学校文化祭にて出張展示「住吉の災害展」を行い、防災について意識を高める取り組みを行いました。

本年度も、各学校とともに災害、防災を考える事業を行う予定です。

### 展示について

・住吉宮町遺跡にある古墳から、災害があったことがわかるというのがすごいと思った。

・災害の恐ろしさと、『常二備へヨ』という言葉の意味が分かって気をつけようと思った。

・文化祭の資料館展示見学は時間がなく、詳しくは聞けなかった事も、今回の展示で詳しく知ることができて、改めて、災害につき考えなおしました。

・(保護者の方から) 地域の災害や、

そこからの復興の話などは、なかなか触れる機会がないので、子供にとつてとても良い時間だと思った。

### 住吉中学校で防災出張展示

合同お茶会に際しては、毎年、本住吉神社世話人会のご支援を頂き、また、お茶の指導は、「菟原茶道会」の皆さまにお願いしております。あつくお礼申し上げます。

平成27年1月17日は、阪神・淡路大震災20年にあたります。一般財団法人住吉学園の20年事業「K-I-Z-U

## ●住吉中学校の生徒さん



住吉中学校 まず、事前に説明



住中。やはり中学生の真縁があります。



## 『住吉村誌』を読む』

# ドビワリをめぐる争論

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター研究員・住吉歴史資料館専門委員 木村 修二



ハイキングコースとして人気の東お多福山を北へ少し下ったところに、「ドビワリ」とよばれる場所があります。そこは東の芦屋谷の方から西の住吉谷の方へ越える峠になっています。そこになぜ「ドビワリ」などという不思議な名前が付けられたのでしょうか？

今では知る人も少ないですが、今から一八八年むかし、住吉谷の下流部に位置する村々(住吉・魚崎・横屋・田中・野寄・岡本)と、東へ三〜四キロ



現在のドビワリ

メートルほど離れた芦屋村・打出村との間で争われた水をめぐる争論に原因があります。

『住吉村誌』四二五ページに次のような一文が掲載されています(よみがなをほどこし、旧字体や旧かなづかいを現代の体裁に直しました)。

(前略) 住吉川によつて潤いを受ける村々は、定まつていたのであつたが、たまたま文政十年六月にいたり、従来何の關係もなかつた芦屋・打出の両村との間に水論が起つた。すなわち打出・芦屋の両村が、住吉川本流の上流に土樋を伏せる等工事をして水を引いたため、たちまち住吉川の水量に影響したので、下流の住吉・魚崎・横屋・田中・野寄・岡本の六ヶ村では、よりより相談中、憤慨した上記区内の若物が土樋工事を破壊した。そこで打出・芦屋の方が承知出来ずとして出訴に及んだ。六ヶ村としても、古来の慣習上黙し切れず訴訟かくて種々曲折があつて、同年十一月に至り代官所において理解

になり、六ヶ村方よりは工事破壊の弁償として銀五貫匁を出す事となり、芦屋・打出の二村は一切住吉川上流より引水しない事になった。(下略)

『村誌』では、この文章にひき続いて、争論の解決にあたつて、双方が和解した際に取り交わされた証文が掲載されていますが、それらによつて、争論のはじまりから解決にいたる経緯をたどると、次のようになるうかと思ひます。

文政一〇年(一八二七)六月のある日、住吉川の下流部の村々の住人達は、水田のかんがいのために川の水が必要となるこの時期に、急に住吉川を流れる水が減つたので、これはおかしいと思ひ上流部に行つて原因を探りにいきました。

すると住吉川東谷の最上流部の流れのところから水を取り、そこから「土樋」を通して「二のこし」と呼ばれる峠を越し芦屋川上流部の谷筋のほうへ水が取られているのを発見しました。

土樋とは、陶製の水管と思われすが、住吉川下流部の人々は、これは芦

村)を仲裁者として、この件の解決をはからせました。

その結果、この争論は次のような仲裁案が出され、双方ともこれを受けいれました。

①今後住吉川の水を芦屋・打出両村が引き取つてはならないし、工事などもしてはならない。

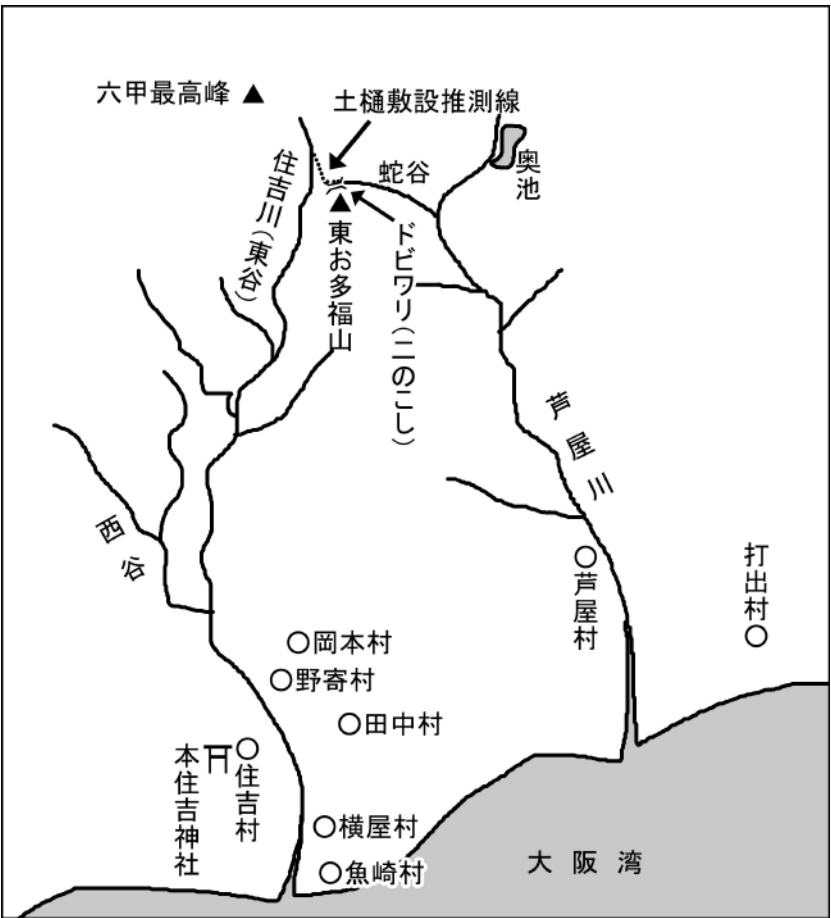
②住吉村ほかの若者が破壊した土樋の弁償として銀五貫目を芦屋側二ヶ村へ支払つこと。芦屋側はこの銀を元に、不足分を補填して溜池を築造すること。

結果的には、住吉村ほか五ヶ村の主張が大きく認められた形ですが、争いの対象物を暴力的に破壊した若者の行為に対しては弁償をさせるという、いちおう双方が痛みを分ける仲裁案になっています。

弁償額の銀五貫は、銀一匁を現在のおよそ一五〇〇円として換算すると、なんと七五〇万円にもなりますので、住吉村ほか五ヶ村の負担も大きいものがあつたといえるでしょう。

五貫文がどのように支払われていたか、芦屋側がこの五貫文をもとに本当に池を築造したのか判然としませんが、この争論から十四年後の天保二年(一八四二)に、芦屋村の役人だった猿丸安時が、今にその姿をとどめる奥池の築造に着手し、およそ二十年かけて完成させています。

この争論を期に、「二のこし」と呼ば

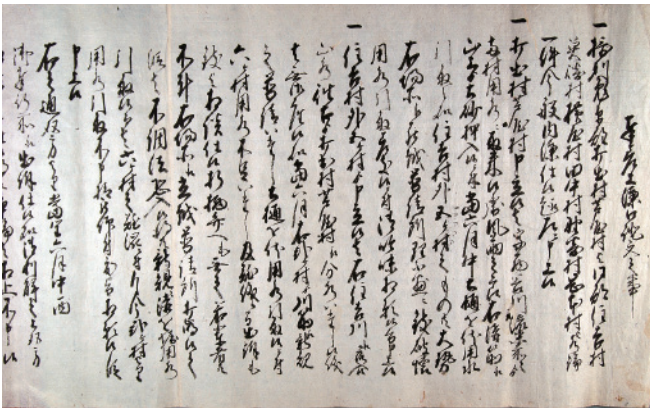


ドビワリ付近関係図

における一方の主張なので、全く新規の土樋敷設が旧来の溝筋利用補強だったかは今となつては確かめるすがありません。

一方、住吉村ほか五ヶ村側は、住吉川の流水を芦屋村・打出村へ分水することなどこれまでなかつたのに、二ヶ村は新たに身勝手な工事をして土樋を設置し、用水を取つたため、六ヶ村側は水不足におちいつてしまったと主張しています。

ただ、住吉村ほか五ヶ村側は、「若輩



ドビワリ争論和解証文

れた峠付近を「ドビワリ(土樋割り)」と呼ぶようになったのです。

ところで、一九七四年の春、このドビワリを調査した田辺眞人さん(現・園田学園女子大学名誉教授)は苦心のすえ、土樋の破片を何点か発見したそうです(『歴史と神戸』六五、一九七四年)。今回、執筆にあたり私も付近を踏査してみました。残念ながら破片を見つけることはできませんでした。なおこのドビワリ付近は瀬戸内海国立公園六甲地区の特別地域に含まれており、自然公園法によつて鉱物や土石の採取は禁じられているので、もし見つけても持ち帰られませんので、ご注意ください。